

源氏物語

夢の浮橋

紫式部

小君は薫の使者として浮舟のもとを訪れ、薫の手紙を託すが、浮舟は人遣いだと言つて小君に会おうとせず、手紙の返事も拒む。

あるじぞこの君に物語すこし聞こえて、「物の怪にやおはすらむ、例のさまに見え給ふ折なく、悩みわたり給ひて、御かたちも異になり給へるを、尋ね聞こえ給ふ人あらばいとわづらはしかるべきことと、見奉り嘆き侍りしもしるく、かくいとあはれに心苦しき御事どもの侍りけるを、今なむいとかたじけなく思ひ侍る。日ごろも、うちはへ悩ませ給ふめるを、いとどかかるところどもに思し乱るるにや、常よりもものおぼえさせ給はぬさまにてなむ。」と聞こゆ。所につけてをかしき薬などしたれど、幼き心地は、そこはかとなくあわてたる心地して、「わざと奉れさせ給へるしに、何事をかは聞こえさせむとすらむ。ただ一言をのたまはせよかし。」など言へば、「げに。」など言ひて、かくなむと移し語れども、ものものたまはねば、かひななくて、「ただ、かく、おぼつかなき御ありさまを聞こえさせ給ふべきなめり。雲の遙かに隔たらぬほどにも侍るめるを、山風吹くとも、またも、必ず立ち寄らせ給ひなむかし。」と言へば、すずろに居暮らさむもあやしかるべければ、帰りなむとす。人知れずゆかしき御ありさまをもえ見ずなりぬるを、おぼつかなく口惜しくて、心ゆかずながら参りぬ。

いつしかと待ちおはするに、かくたどどしくて帰り来たれば、すさまじく、なかなかかなりと思すことさまさまにて、人の隠し据ゑたるにやあらむと、わが御心の、思ひ寄らぬ隈なく落とし置き給へりしならひにとぞ、本に侍める。

(夢浮橋)

とりかへばや物語

父大納言の頼み

いつの頃にか、権大納言にて大将かけ給へる人、御容貌、身の才、心もちあぶりはじめ、人柄、世のおぼえもなべてならずものし給へば、何事かは飽かぬことあるべき御身ならぬに、人知れぬ御心のうちのもの思はしきぞ、いと尽きせざりける。

北の方二所ものし給ふ。一人は源の宰相と聞こえしが御むすめにものし給ふ。

御心ざしはいとしもすぐれねど、人より先に見初め給ひてしかば、おろかならず思ひ聞こえ給ふに、いとど世になく玉光る男君さへ生まれ給ひにしかば、またなく去りがたきものに思ひ聞こえ給へり。いま一所は藤中納言と聞こえしが御むすめにもものし給ふが御腹にも、姫君のいとうつくしげなる生まれ給ひしかば、さまざまめづらしく、思ふさまに思しかしづくこと限りなし。

上たちの御有様のいづれもすぐれ給はぬを、思ふさまならず口惜しきことに思したりしかど、今は君たちのさまごまうつくしうて生ひ出で給ふに、いづれの御方をも捨てがたきものに思ひ聞こえ給ひて、今はさる方におはしつきにたるべし。君たちの御容貌のいづれもすぐれ給へるさま、ただ同じものとのみ見えて、取りも違へつべうものし給ふを、同じ所ならましかば不用ならましを、とところどころにて生ひ出で給ふぞ、いとよかりける。

おほかたはただ同じものと見ゆる御容貌の、若君はあてにかをり気高く、なまめかしき方添ひて見え給ひ、姫君は華々とほこりに、見ても飽く世なく、あたりにもこぼれ散る愛敬などぞ、今より似るものなくものし給ひける。

いづれもやうやう大人び給ふまに、若君はあさましうもの恥ぢをのみし給ひて、女房などにだに、少し御前遠きには見え給ふこともなく、父殿をもうとく恥づかしくのみ思して、やうやう御文習はし、さるべきことどもも教へ聞こえ給へど、思しもかけず、ただいと恥づかしとのみ思して、御帳のうちにのみ埋もれ入りつつ、絵かき、難遊び、貝覆ひなどし給ふを、殿はいとあさましきことに思しのためはせて、常にさいなみ給へば、果て果ては涙をさへこぼして、あさましうつつましの思しつつ、ただ母上、御乳母、さらぬはむげに小さき童などにぞ見え給ふ。さらぬ女房などの、御前へも参れば、御几帳にまつはれて、恥づか

## 堤中納言物語

はいずみ

身分卑しからぬ男には、長年一緒に暮らす妻がいた。そのうち男は、とある人物の娘に懸想し、通いはじめた。娘の両親から、もとの妻と一緒に住みながら、娘のもとに通うことの不諱実さをなじられた男は、娘を自分の家に迎え入れると宣言してしまう。これを知った妻は、身を引いて、男と暮らす家から出ていくことを決める。

妻が家を出る夜、馬上で月に照らされる妻の美しさに、男は思わず感じ入る。粗末な家に到着した妻は、心配する供の童に「いづこにか送りはせしと人間はば心はゆかぬ深川まで」という歌を託す。妻の歌に感動した男は、妻を迎えに行き、通っていた娘の引き取りを延期すると娘の両親に伝える。そんな折、男は娘のもとを再び訪問する。

この男、いとひききりなりける心にて、「あからさまに。」とて、今の人のもとに、昼間に入り来るを見て、女、「にはかに殿おはすや。」と言へば、うちとけてあたりけるほどに、心騒ぎて、「いづら、いづこにぞ。」と言ひて、櫛の箱を取り寄せて、白きものをつくると思ひたれば、取り違へて、掃墨入りたる畳紙を取り出でて、鏡も待たずうち装束きて、女は、「『そこにて、しばし。な入り給ひそ。』と言へ。」とて、せひも知らず、きしつくるほどに、男、「いととくも疎み給ふかな。」とて、簾をかき上げて入りぬれば、畳紙を隠して、おろおろにならして、うち口おほひて、襦まくれに、したてたりと思ひて、まだらに指形につけて、目のきろきろとして、またたきあたり。

男、見るに、あさましよう、めづらかに思ひて、いかにせむと恐ろしければ、近くも寄らで、「よし、今しばしありて参らむ。」とて、しばし見るも、むくつけければ往ぬ。

女の父母、かく来たりと聞きて来たるに、「はや出で給ひぬ。」と言へば、いとあさましく、「名残なき御心かな。」とて、姫君の顔を見れば、いとむくつけくなりぬ。おびえて、父母も倒れ臥しぬ。

むすめ、「など、かくはたまふぞ。」と言へば、「その御顔は、いかになり給ふぞ。」とも、え言ひやらず。「あやしく、などかくは言ふぞ。」とて、鏡を見るままに、かかれれば、我もおびえて、鏡を投げ捨てて、「いかになりたるぞや、いかになりたるぞや。」とて泣けば、家のうちの人も、ゆすりみちて、「これをば思ひ疎み給ひぬべきことをのみ、かしこにはし侍るなるに、おはしたれば、御顔のかくなりたる。」とて、陰陽師呼び騒ぐほどに、涙の落ちかかりたる所の、例の肌にか

## 住吉物語

## 初瀬の霊夢

春秋過ぎて、九月ばかりに初瀬に籠りて、七日といふ、夜もすがら行ひて、暁がたに少しまどろみたる夢に、やんごとなき女、そばむきて居たり。さし寄りて見れば、わが思ふ人なり。うれしき、せんかたなくて、「いづくにおはしますか。かくいみじきめを見せ給ふぞ。いかばかりか思ひ嘆くと知り給へる。」と言へば、うち泣きて、「かくまでとは思はざりしを。いとあはれにぞ。」と言ひて、「今は帰らん。」と言へば、袖をひかへて、「おはしまし所、知らせさせ給へ。」とのたまへば、

わたつ海のそことも知らずわびぬれば住吉とこそあまは言ひけれ

と言ひて立つを、ひかへて返さずと見て、うちおどろきて、夢と知りせばと、悲しかりけり。

さて、仏の御しるしぞとて、夜のうちにでて、住吉といふ所尋ねみんとて、御供なる者に、「精進のついでに、天王寺、住吉などに参らんと思ふなり。おのおの帰りに、この由を申せ。」と仰せられければ、「いかに、御供の人なくては侍るべき。捨て参らせて参りたらんに、よきこと候ひんや。」慕ひあひけれども、「示現をかうぶりたれば、そのままにん。ことさらに、思ふやうあり。言はんままにてあるべし。いかに言ふとも、具すまじきぞ。」とて、御隨身一人ばかりを具して、浄衣のなえらかなるに、薄色の衣に白き單着て、藁沓、脛巾して、竜田山越え行き、隠れ給ひにければ、聞こえわづらひて、御供の者は帰りにけり。

住吉には、その暁、姫君の、御跡に臥したる侍従にのたまふやう、「まどろみたりつる夢に、少将のたまふやう、心細かりつる山の中に、ただひとり草枕して、起き臥し給ふ所に行きつれば、我を見つけて、袖をひかへて、

尋ねかね深き山路に迷ふかな君が住みかをぞこと知らせよ

となんありつる。」と、あはれに語り給へば、侍従、「げにいかばかり嘆き給ふらん。まことの御夢にこそ侍れ。あはれとおぼさずや。」と聞こゆれば、「石木ならねば、いかでか。」など言ひつつ、あはれげにおぼしたりけり。

中将は、ならばぬさまなれば、藁沓にあたりて、足より血落り。行きやらぬ気色なれば、道行き人、あやしき者ども、目をつけてぞ見合ひける。さても、泣く泣く、酉の時ばかりに、はるばると並み立てる松の一むらに、芦屋ところどころにありて、海見えたる所に行きつき給ひぬれども、いづくとも知らず、思ひわづらひて、松の下に休み給ひけるに、十あまりなる童、松の落ち葉拾ひけるを呼び給ひて、「おのれは、いづくに住むぞ。このわたりをば、いづくといふぞ。」と問へば、「住吉とん申す。やがてこれに侍るなり。」と言へば、いとうれしきことと聞きて、「このわたり

## しのびね

## 嵯峨野わたり

神無月ばかりのことなるに、少将殿は嵯峨野わたりの紅葉御覽ありて、小倉の裾など心静かにながめ歩き給ふほどに、いと由ある小柴垣のうちに、耳馴れぬほどの琴の音響き合ひて聞く。「思ひよらぬ琴の音かな。いかなる人の弾くらん。」と、隨身に案内させ給ふに、「御簾かけわたして、格子二間ばかり上げたるうちに侍る。」と申せば、何となくおはして、小柴垣の蔭にうち隠れて聞きおはす。

日も暮れゆけば、琴も弾きさしつ。月やうやうさし出でてをかききほどに、何人ならん、ゆかしと思して、人の見ぬ方の實の子に尻かけてながめ居給ふに、おとなしやかなる声にて、「いと艶なるにほひかな。いづくより吹きくる風にや。」と言へば、少し若き声にて、「姫君の方に、御火取り召しつる、さにこそあらめ。」と言ふに、さればこそ、姫君など言ふと思して、見つけられなば、たよりにして言ひもよらまほし。見あらはさぬほどは、人の容貌も知りたきことぞかし。されども琴の音にかよひたるありさまならば、などておろかならん。いかにして見るわざしてんと思して、やをらのぼりて、立藪のもとにたすみ給へど、格子参らす人、見もついで入りぬ。

大殿油参る気色にて、いづくも仮の住み処と見えて、したたかならずあさはかなる住まひなれば、ここかしこ垣間見歩き給ふ。隅の隅の方に、細き隙見つけてのぞき給へば、人々集まりて、絵にやあらん、巻物見居たり。

少し奥の方に添ひ臥したる人や、もし姫君といふ人ならんと、目をつけて見給へば、菊の移るひたる五つばかり、白き袴ぞ見ゆる。髪はこぼれかかりたるは、まづうつくしやと、ふと見たるに、顔はそばみれば見えぬ。四十あまりなる尼君、白き衣のなえはめる着て、寄り臥して、絵物語見居たり。「目のかすみ、小さき文字は見えぬこそいとあはれ。積もる年のしるしにこそ。火明かくかかげんや。」と言ふに、小さき童寄りて、ここごとしくかかげたれば、さらさらと見ゆる。

奥なる人、腕を枕にして居給へれば、「大殿籠るにや、さらば読みさしてん。」と言ふに、少し起き上がりて、「さもあらず、よく聞き侍るを。」とて、少しほろみたる顔の、言はんかたなくうつくしければ、胸うちさわぎて、あさましきまでまもらるるに、いかなる人の、かかる山里には忍びて居たらんとあはれにて、出づべき心地もせず。

絵見果てて人々さしのき、「なほめづらしきにほひのするかな。ここもとに薫き給ふ香の香

## &lt; 学びを広げる 『蜻蛉日記』 広がる逸話 ワークシート

その歌に対し、 兼家はどうか 応じたか	道綱母は歌をど のように兼家 に伝えたか	そのことを受け て、兼家はど うしたか	兼家が訪ねて来 たとき、門をど うしたか	蜻蛉日記
				拾遺和歌集
				大鏡

◆ 学びを広げる

『蜻蛉日記』 広がる逸話 ワークシート

年 組 番 号

〃

紫式部日記

紫式部

## 和泉式部と清少納言

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見え侍るめり。歌は、いとをかきこと。もおぼえ、歌の理、まことの歌詠みさまにこそ侍らざめれ、口にまかせたることもに、かならずをかきひとふしの、目にとまる詠み添へ侍り。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりあたらむは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすちに侍るかし。恥づかしげの歌詠みやとはおぼえ侍らず。

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書きちらして侍るほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむと思ひ好める人は、かならず見劣りし、行く末うたてのみ侍れば、艶になりぬる人は、いとすこすなる折も、ものあはれにすすみ、をかきことも見すくさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよく侍らむ。

## 大鏡

## 宣耀殿の女御

御女、村上の御時の宣耀殿の女御、容貌をかしげにうつくしうおはしけり。内裏へ参り給ふとて、御車に奉り給ひければ、わが御身は乗り給ひけれど、御髪のは、母屋の柱のもとにぞおはしける。一筋を陸奥紙に置きたるに、いかにも隙見えすとぞ申し伝へためる。御目の尻の少し下がり給へるが、いとどらうたくおはするを、帝、いとかしこく時めかさせ給ひて、かく仰せられけるとか。

生きての世死にてののちのちの世も羽を交はせる鳥となりなむ  
御返し、女御、

あきになる言の葉だにも変はらずは我も交はせる枝となりなむ

『古今』浮かべ給へりと聞かせ給ひて、帝、試みに本を隠して、女御には見せさせ給はで、「やまと歌は」とあるをはじめにて、先づの句の言葉を仰せられつつ問はせ給ひけるに、言ひ違へ給ふこと、詞にても歌にてもなかりけり。かかることなむと、父大臣は聞き給ひて、御装束して、手洗ひなどして、所々に誦経などし、念じ入りてぞおはしける。

帝、箏の琴をめでたく遊ばしけるも、御心に入れて教へなど、限りなく時めき給ふに、冷泉院の御母后失せ給ひてこそ、なかなかこよなくおぼえ劣り給へりとは聞こえ給ひしか。「故宮の、いみじうめざましく、安からぬものに思したりしかば、思ひ出づるに、いとほしく悔しきなり。」とぞ仰せられける。

(左大臣師尹)

## 大鏡

## 鶯宿梅

「いとをかしようあはれに侍りしことは、この天曆の御時に、清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、求めさせ給ひしに、某主の藏人にていますがりし時、承りて、『若き者どもはえ見知らじ。きむち求めよ。』とのたまひしかば、一京まかり歩きしかども、侍らざりしに、西の京のそこそなる家に、色濃く咲きたる木の、様体うつくしきが侍りしを、掘り取りしかば、家あるじの、『木にこれ結び付けて持て参れ。』と言はせ給ひしかば、あるやうこそはとて、持て参りて候ひしを、『なにぞ。』とて御覽じければ、女の手にて書きて侍りける、

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ

とありけるに、あやしく思し召して、『何者の家で。』と尋ねさせ給ひければ、貫之の主の御女の住む所なりけり。『遺恨のわざをもしたりけるかな。』とて、あまえおはしましたける。繁樹、今生の辱号は、これや侍りけむ。さるは、『思ふやうなる木持て参りたり。』とて、衣かづけられたりしも、辛くなりなき。』とて、こまやかに笑ふ。

(雑々物語)

◆学びを広げる 日本三大怨霊 コメントシート

年 組 番 号

三人の描写の共通点／相違点

共通点：

相違点：

見いだした共通点や相違点が生まれた背景

俊頼髓脳

源俊頼

## 鷹狩りの歌

霰降る交野のみのかりころも濡れぬ宿貸す人しなれば  
濡れ濡れもなほ狩りゆかむはし鷹の上毛の雪をうち払ひつつ

これは、長能、道済と申す歌詠みどもの、鷹狩りを題にする歌なり。ともによき歌どもにて、人の口に乗れり。のち人々、我も我もと争ひて、日ごろ経けるに、なほこのこと今日切らむとて、ともに具して、四条大納言のもとにまうでて、「この歌二つ、互ひに争ひて、今にこと切れず。いかにもいかにも判ぜさせ給へとて、おのおの参りたるなり。」と言へば、かの大納言、この歌どもをしきりに詠め案じて、「まことに申したらむに、おのおの腹立たれじや。」と申されければ、「さらば。ともかくも仰せられむに、腹立ち申すべからず。その料に参りたれば、すみやかに、承りて、まかり出でなむ。」と申しければ、さらばとて申されけるは、「『交野のみの』といへる歌は、ふるまへる姿も、文字遣ひなども、はるかにまさりて聞こゆ。しかはあれども、もろもろの僻事のあるなり。鷹狩りは、雨の降らむばかりにぞ、えせでとどまるべき。霰の降らむによりて、宿かりてとまらむは、あやしきことなり。霰などは、さまで狩衣などの濡れ通りて、惜しきほどにはあらじ。なほ、『狩りゆかむ』と詠まれたるは、鷹狩りの本意もあり、まことにもおもしろかりけむとおぼゆ。歌柄も、優にてをかし。撰集などにも、これや入らむ。」と申されければ、道済は、舞ひ奏でて出でにけり。

正徹物語

亡き人恋ふる

正徹

俊成の家は五条室町にてありしなり。定家卿、母に後れてのちに、俊成のもとへ行きて見侍りしかば、秋風吹きあらし、いつしか俊成も心細きありさまに見え侍りしほどに、定家の一条京極の家より父のもとへ、

玉ゆらの露も涙もとどまらず亡き人恋ふる宿の秋風

と詠みて遣はされし、あはれさも悲しさも言ふ限りなく、もみにもうだる歌様なり。「玉ゆらは、しばしといふことなり。末に「秋風」を置きたるまで、あはれに身にしむに、「亡き人恋ふる」とあるも、悲しう聞こえたるなり。俊成の返歌に、

秋になり風の涼しく変はるにも涙の露ぞしのに散りける

とすげなげに詠めるが、何ともえ心得ぬなり。定家は母のことなれば、あはれにも悲しうも、身をもみて詠めるは理なり。俊成はわが女房のことなり。わが身はや老体なれば、あぢきなし、悲しなど言ひては似合はねば、ただ、折、秋になり、「風の涼しく」と何となげに言へるが、何ともおぼえず殊勝なり。

風姿花伝

世阿弥

## 秘すれば花

秘する花を知ること。秘すれば花なり、秘せずは花なるべからず、となり。この分け目を知ること、肝要の花なり。

そもそも一切の事、諸道芸において、その家々に秘事と申すは、秘するによりて大用あるがゆゑなり。しかれば、秘事といふことをあらはせば、させることにもなきものなり。これを、「させることにもなし。」と言ふ人は、いまだ秘事といふことの大用を知らぬがゆゑなり。

まづ、この花の口伝におきても、ただ珍しきが花ぞと、みな人知るならば、「さては珍しきことあるべし。」と思ひまうけたらん見物衆の前にては、たとひ珍しきことをすると、見手の心に珍しき感はあるべからず。見る人のため、花ぞとも知らでこそ、為手の花にはなるべけれ。されば、見る人は、ただ思ひのほかにもしろき上手とばかり見て、これは花ぞとも知らぬが、為手の花なり。さるほどに、人の心に思ひも寄らぬ感を催す手立て、これ花なり。

(第七)

玉勝間

本居宣長

## 師の説になづまざること

おのれ古典を説くに、師の説と違へること多く、師の説のわるきことあるをば、わきまへ言ふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人多かれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、「のちによき考への出で来たらむには、必ずしも師の説に違ふとて、な憚りそ。」となむ教へられし。こはいと尊き教へにて、わが師の世に優れ給へる一つなり。

おほかた、古を考ふること、さらに一人二人の力もて、ことごとくあきらめ尽くすべくもあらず。また、よき人の説ならむからに、多くの中には、誤りもなかなからむ。必ずわるきことも混じらではえあらず。そのおのが心には、今は古の心ごとく明らかなり、これをおきてはあるべくもあらず、と思ひ定めたることも、思ひのほかに、また人の異なるよき考へも出で来るわざなり。あまたの手を繰るまにまに、先々の考への上を、なほよく考へ究むるからに、次々に詳しくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よき悪しきを言はず、ひたぶるに古きを守るは、学問の道には言ふかひなきわざなり。

またおのが師などのわるきことを言ひあらはすは、いとも畏くはあれど、それも言はざれば、世の学者その説に惑ひて、長くよきを知る期なし。師の説なりとして、わるきを知りながら、言はずつつみ隠して、よざまにつくるひをらむは、ただ師をのみ尊みて、道をは思はざるなり。

南総里見八犬伝

曲亭馬琴

## 芳流閣の決闘

八犬士の一人である犬塚信乃は、亡父の遺言に従って、父の形見の名刀村雨丸を譜我成氏に献上しようとするが、刀を偽物とすり替えられ、譜我城で敵の間諜（スパイ）と疑われて窮地に陥る。

いにしへの人言はずや、禍福はあざなふ繩のごとし、人間万事往くとして、塞翁が馬ならぬはなし。それは福の寄る所、はた禍の伏する所、かれにあればこれにあり、とは思へどもかねてよき、誰かよくその極みを知らん。

憐れむべし、犬塚信乃は、親の遺言、形見の名刀、心に占めつ身につけつ、艱苦のうち、年を経て、得がたき時を得てしかば、はるばる許河へもたらして、名を揚げ、家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刃は元のものならで、わが身をつんざく仇とぞなりし、憾みをここに積よしもなく、こと急にして意外にあり。僅かに当座の辱めを、避けばやと思ふばかりに、あまたの困みを切り開きて、芳流閣の屋の上に、よじ登れどもとにかくに、逃れ去るべき道のなければ、そこに必死を究めたる、心の中はいかなりけん、想像るだにいと痛まし。

さればまた、犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月ごろ獄舎につなされし、禍は今恩赦の福、わが縛めの縄解けて、人にぞかかる捕り手の役義、犬塚信乃をからめよとて、なまじひに運み出だされつ。他の憂ひを身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、否みて許さるべくもあらぬ、君命重くいや高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる軒の上まで、身を籠ませて登りて見れば、足もと遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸しの、炎熱をわたる敷き瓦は、うねり隙なく波に似て、下には大河滔々たる、こ生き死にの海に入る、流れは名に負ふ坂東太郎。水際の小舟楫を絶えて、進退既に窮まりし、敵にしあればいかで我、つなぎ止めんとむささびの、樹伝ふごとくさらさらと、登り果てたる三層の、屋根には目柴差すよしもなく、互に隙をうかがひつつ、にらまへ合ふて立つたる形勢、浮図の上なる鶴の巢を、巨蛇のねらふに似たりけり。

## 東海道中膝栗毛

## 十返舎一九

江戸の神田八丁堀の住人、弥次郎兵衛と居候の北八は、厄落しのために伊勢参りの旅に出る。東海道を行く二人は、珍道中を続けている。

弥次郎兵衛あまりにくたびれば、先づここはづれの茶店に腰をかけたるに、あるじの婆々「アイ茶アまいりませ

弥次「モシ赤坂まではもふ少しだの

婆々「アイたん十六丁おさるが、おまへ一人なら、この宿に泊まらしやりませ。この先の松原

へは、悪い狐が出おつて、旅人衆がよく化かされ申すは

弥次「そりやア気のねへ話だ。しかしここへ泊まりたくても、連れが先へ行つたからしかたがねへ。エエきついこたアねへ。やらかしてくれふ。アイお世話

ト茶代を置き、このところを立ち出で行くに、暗さは暗しうそ気味悪く、まゆ毛につばをつけながら行く。はるか向かふにて、狐の鳴く声「ケンケン

弥次「ソリヤ鳴きやアがるは、おのれ出て見ろ。ぶち殺してくれふ

ト力みかへつてたどり行くに、北八も先へかけぬけ、ここまで来たりしが、これもここへ狐が出るといふ話を聞きて、もしもばかされてはつまらぬと、弥次郎を待ち合はせ、連れ立ち行かんと思ひ、土手に腰をかけ、たばこのみいたりけるが、それと見るより

北八「ライライ弥次さんか

弥次「ヲヤ手めへなせここにある

北八「宿とりに先へ行かふと思つたが、ここへは悪い狐が出るといふことだから、一緒に行かふと思つて待ち合はせた

ト言ふに弥次郎心つき、こいつきやつめが、北八に化けたなと思ひければ、わざと弱みを見せず

弥次「糞を食らへ、そんなでいくのじやアねへは

北八「ヲやおめへ何をいふ。そして腹が減つたるふ。餅を買つて来たから食ひなせへ

弥次「ばかアぬかせ。馬糞が食らはれるものか

北八「ハハハハハコレ俺だはな

弥次「俺だもすさまじい。北八にそのままだ。よく化けやアがつた、畜生め

北八「アイタタタタ弥次さん、コリヤどふする

弥次「どふするもんか。ぶち殺すのだ

トうつかりしたところをぐつと突き倒して、弥次郎その上へ乗りかかり押さへる



## 古事記

## 倭建の東征

天皇、また、しきりに倭建命にのりたまはく、「東の方の十二の道の荒ぶる神とまつろはぬ人どもとを言向け和し平らげよ。」とのりたまひて、御組友耳建日子を副へて遣はしし時に、ひひら木の八尋矛を賜ひき。

故、命を受けて、まかり行きし時に、伊勢大御神の宮に参入りて、神の朝廷を拝みて、すなはちその叔母、倭比売命に白さく、「天皇のすでに吾を死ねと思ふゆゑや、何。西の方の悪しき人どもを撃ちに遣はして、返り参上り来し間に、いまだいくばくの時を経ぬに、軍衆を賜はずして、今、さらに東の方の十二の道の悪しき人どもを平らげに遣はしつ。これによりて思ふに、なほ吾をすでに死ねと思ほしめすぞ。」と、憂へ泣きてまかりし時に、倭比売命、草那芸剣を賜ひ、また、御囊を賜ひて、のりたまひしく、「もし急かなることあらば、この囊の口を解け。」とのりたまひき。

相武国に至りし時に、その国造、詐りて白ししく、「この野の中に大き沼あり。この沼の中に住める神は、甚だちはやぶる神ぞ。」と白しき。ここに、その神をみそこなはさむとして、その野に入りましき。しかくして、その国造、火をその野につけき。故、欺かえぬと知りて、その叔母、倭比売命の賜へる囊の口を解き開けて見れば、火打ち、その内にあり。ここに、まつその御刀をもちて草を刈り払ひ、その火打ちをもちて火を打ち出だして、向かひ火をつけて焼き退け、還り出でて、皆その国造らを切り滅ぼして、すなはち火をつけて焼きき。故、今に焼遣といふ。

倭建は東国を次々と平定していったが、伊吹山（現在の滋賀県と岐阜県との境にある山）の神を討とうとして大きな痛手を受けた。倭建は思うように足も動かず、杖をつきながらふるさと大和（現在の奈良県）へ向かう。

そこより幸して、三重村に至りし時に、また、のりたまひしく、「吾が足は、三重に曲がれるがごとくして、甚だ疲れたり。」とのりたまひき。故、そこを名づけて三重といふ。そこより幸して、能須野に至りし時に、国を思ひて、歌ひていはく、

倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山籠れる 倭し麗し



■資料補足

- ・【古文編】p. 40「竹取物語」の二次元コードを読み込んだ場合の画面イメージです。



◆ 日本語の助詞・助動詞にあたる主な漢字

助動詞						助詞										字	読み	用法(意味)
若・如	可	使・令・遣	也	為	見・被・為	不・弗	而已矣	已・而已・	耳・爾・	者	乎・哉・矣	与	与	自・從・由	之			
ごと(シ)	べ(シ)	し(ム)	なり	た(リ)	る・ら(ル)	ず	のみ	は	かな	と	よ(リ)	よ(リ)	の	や	か・や			
比況(〜のようだ)	可能(〜できる)／許可(〜してもよい)／当然(〜すべきである)／勧誘(〜するのがよい)	使役(〜させる)	断定(〜である)	断定(〜である)	受身(〜れる・〜られる)	打消(〜しない)	限定(〜だけ)	主格(〜は)	詠嘆(〜だなあ)	並列(〜と)	比較・選択(〜より)	起点(〜から・〜より)	連体修飾格(〜の)／主格(〜が)	呼びかけ(〜よ)／提示(〜は)	反語(〜だろうか、いや〜ない)	疑問(〜か)		

鹿柴(日)



鹿柴(中)



■資料補足

- ・再生ボタンをクリックするとその音声流れます。
- ・【漢文編】p. 18「漢詩——近体詩」「鹿柴」の朗読音声の画面イメージです。
- ・(日)は日本語、(中)は中国語の音声を表します。

史記——伯夷

天道是邪非邪

司馬遷

伯夷、叔齊、孤竹君之二子也。父欲立叔齊，及父卒，叔齊讓伯夷，伯夷曰：「父命也。」遂逃去。叔齊亦不肯立，而逃之。國人立其中子。於是伯夷、叔齊聞西伯昌善養老，盡往師焉。及至，西伯卒，武王載木主，為文王東伐，村伯夷、叔齊叩馬而諫，曰：「父死不葬，爰及干戈，不可謂孝。以臣弑君，可謂仁乎？」左右欲兵之，太公曰：「此義人也。」扶而去之。

武王曰：「平殷亂，天下宗周，而伯夷、叔齊恥之，義不食周粟，隱於首陽山，采薇而食之。」及餓，且死，作歌，其辭曰：

登彼西山兮，采其薇矣。

以暴易暴兮，不知其非矣。

神農、虞夏忽焉沒兮，我安適歸矣。

于嗟徂兮，命之衰矣。

遂餓死於首陽山。

或曰：「天道無親，常與善人。」若伯夷、叔齊，可謂善人者，非邪？積仁深行如此，而餓死，且七十子之徒，仲尼獨薦顏淵為好學，然回也，屢空糟糠，不厭，而卒。蚤夭，天之報施善人，其何如哉？盜賊日殺不辜，肝人之肉，暴戾恣睢，

史記——劉邦

大丈夫当如此也

司馬遷

高祖沛豐邑中陽里人姓劉氏字季父曰太公母曰  
劉媪其先劉媪嘗息大沢之陂夢與神遇是時雷電晦  
冥太公往視則見蛟龍於其上已而有身遂產高祖

高祖為人隆準而竜顔美須鬣左股有七十二黒子  
仁而愛人喜施意豁如也常有天度不事家人生產作

業及壯試爲吏爲泗水亭長廷中吏無所不狎侮好酒  
及色常從王媪武負貰酒醉臥武負王媪見其上常有

竜怪之高祖每酤留飲酒讐數倍及見怪蔵竟此兩家  
常折券弃責

高祖常繇咸陽縦觀秦皇帝喟然太息曰嗟乎大  
丈夫当如此也

(高祖本紀)

史記—劉邦

司馬遷

大風起兮雲飛揚

高祖還焮，過沛，留置酒，沛宮悉召故人、父老子弟縱酒。發沛中，得百二十人，教之歌。酒酣，高祖擊筑，自為

歌詩曰

大風起兮雲飛揚

威加海內兮燔故鄉

安得猛士兮守四方

令兒皆和習之。高祖乃起舞，慷慨傷懷，泣數行下。謂沛父兄曰：「游子悲故鄉，吾雖都關中，萬歲後，吾魂魄猶苦思沛。」且朕自沛公以誅暴逆，遂有天下，其以沛為朕湯沐，邑復其民，世世無有所與。沛父兄諸母故人，日樂飲極驪道，舊故為笑，樂十餘日。高祖欲去，沛父兄固請留高祖。高祖曰：「吾人衆多，父兄不能給。」乃去。  
(高祖本紀)

## ▼題烏江亭(杜牧)

## 【口語訳】

烏江亭の壁に書き付ける

戦の勝敗は兵法に優れた軍事家でも予期することはできない。

(だから、たとえ敗れても) 恥辱に耐え肩身の狭い思いを我慢(して雪辱を期)するのが、  
真の男児というものだ。

江東の若者には才能に優れた人物がたくさんいる。

(だから、項羽が江東に渡って再起を図り) 風が土を巻き上げるような勢いで再び攻め寄せたならば、(天下の大勢は) どうなっていたかわからない。

## ▼烏江亭(王安石)

## 【口語訳】

烏江亭

連戦に疲れ果て、血気盛んな兵士たちも悲しみに沈む。

中原での敗戦は決定的で、もはや形勢を挽回することは難しい。

江東の若者たちがなお残っていたとしても、

大王(項羽)とともにすすんで再起を図ろうとしただろうか、いや、しなかつただろう。

不い至と死し生い  
 肯か今こ亦も當た烏  
 過か思し為な作な江  
 江か項か鬼き人に  
 東か羽か雄こ傑に

李  
清  
照

◆学びを広げる 『史記』項王の生きざま ワークシート

年 組 番 氏 名

① 共通して感じる点

対照的な点

② 杜牧の項王に対する思い

王安石の項王に対する思い

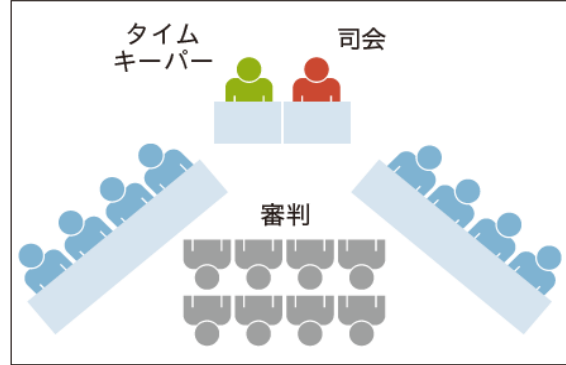
③ 項王の生きざまについて自分はどう考えるか

## ディベート

二項対立的なテーマに対して、二つの異なる立場を設定し、時間制限などのルールに従って行う討論。

### 手順

- 1 肯定側・否定側の二つのチームと、司会・審判などに分かれる。
- 2 チームの立論の根拠となる情報を整理する。
- 3 両チームの代表者が立論を述べる。
- 4 相手チームに対する質問や反論を述べる。
- 5 両チームが意見を述べる（最終弁論）。
- 6 審判が判定をする。



### 二項対立的なテーマ例

- ◆ 日本はサマータイム制を導入すべきである。
- ◆ 救急車の利用を有料化すべきである。
- ◆ 高等学校まで義務教育にすべきである。

# 送薛存義之任序 柳宗元



河東薛存義將行，柳子載肉於俎，崇酒於觴，追而送之。江潛飲食之，且告曰：「凡吏於土者，若知其職乎？蓋民之役，非以役民而已也。凡民之食於土者，出其什一，備乎吏，使司平於我也。今受其直，怠其事者，天下皆然。豈唯怠之，又從而盜之，向使備一夫於家，受若直，怠若事，又盜若貨器，則必甚怒而黜罰之矣。以今天下多類此，而民莫敢肆其怒而黜罰之。」

何哉？勢不同也。勢不同而理同，如吾民何？有達於理者，得不恐而畏乎？存義假令零陵二年矣，蚤作而夜思，勤力而勞心，訟者平，賦者均。老弱無懷，詐暴憎，其為不虛取直也，的矣。其知恐而畏也，審矣。吾賤且辱，不得與考績辭。」

(唐宋八大家文選本)

◆序 文体的一種。こは、送別の時に贈る文章。

①河東 地名。現在の山西省水滄市の西。

②薛存義 生没年未詳。有能な役人として知られ、憲法思想の具象代理に抜擢された。

③柳子 作者自身をいう。「子」は、こ。こは、男子の自稱。

④俎 祭器で、肉を載せる主な板形の膳。

⑤東家土者 その土地で役人となる者。

⑥食於土者 土地を耕して生活している者。農民。

⑦什一 (収穫の十分の一)の租税。

⑧平 公平な裁断。

⑨直 こは、報酬の意。

⑩黜罰 退け罰する。「黜」は官職を奪い下す、やめさせるの意。  
 ⑪假令 仮令、考慮の仮の長官であること。「假」は、地方長官等。陳郡は現在の河南省許州府。  
 ⑫賦 租税。  
 ⑬的 確明の意。朝廷で、官吏の功績を調べ、それによって降格、昇進を決めるための合議。

◆持 [A] 今にも [B] ようとす。 [C] 再読文字。

◆ [A] 而 [B] た [C] する だけだ。

◆ [A] 唯 [B] 又 [C] どうして だけ [D] する だけであらうか、また [E] だ [F] あるのだ (果加)。

◆ 向使 [A] 仮に [B] したら (仮定)。

◆ 何哉 どういうわけか (疑問)。

◆ 如 [A] 何 [B] 何をどうしようか (疑問)。

◆ [A] 乎 [B] する であらうかい、や、 [C] しない (反題)。

## 古文復興

韓愈の生きていた時代の文章は、四字句や六字句によって対句を構成し、典故（過去の詩文や出来事）の使用や押韻、平仄などの制約が多い四六駢儷文が主流だった。韓愈は四六駢儷文を排し、先秦・秦漢の散文である「古文」に復古して、達意の文章を書くことを主張した。これを「古文復興」という。韓愈は次に言う。

「私が古文を作るのは、今と異なる文章を学び取るためだけではない。（中略）もともとは古道を目指しているのである。」（題哀辞後）

「古道」とは、上古の聖人の考えやその政治のことである。韓愈は古文を作ることで、そのなかにある古道を目指し、古道を学び取ろうとしたのであった。

韓愈の古文復興は、親友の柳宗元が賛同し、北宋の欧陽脩に至って完成した。それ以降、古文は中国の文章の主流となり、名文の規範として広く読まれるようになったのである。

老子

無用之用

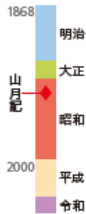
三十輻共一轂。当其無，有車之用。埴埴以  
 為器。当其無，有器之用。鑿戶牖，以為室。当其  
 無，有室之用。故有之以為利，無之以為用。

(第十一章)

## 山月記

中島敦

1 隴西の李徴は博才穎、2 天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、3 狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、4 賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、5 故山、6 號略に帰臥し、人と交わりを絶つて、ひたすら詩作にふけた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、7 詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、8 文名は容易に揚がらず、9 生活は日を逐うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥に駆られてきた。この頃からその容貌も10 峭刻となり、肉落ち骨秀で、11 眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第した頃の豊頬の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。12 数年の後、貧窮に堪えず、13 妻子の衣食のために14 節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩は既にはるか高位に進み、15 彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかつたその連中の下命を拜さねばならぬことが、16 往年の備才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、17 想像に難くない。彼は快々として18 樂しまず、19 狂悖の性はい



- 1 隴西 中国甘肃省東南部の地名。
- 2 才穎 才能が抜きん出ている様子。
- 3 天宝 唐の玄宗皇帝時代の年号(742―755)。
- 4 虎榜 官吏登用試験(科擧)合格者(進士)の姓名を掲げる板。
- 5 江南尉 江南は長江下流の一带。ここでは浙江省辺りをいう。「尉」は昔中国で軍事や警察などのことを扱った官。
- 6 狷介 固く自分の意志を守り妥協しない様子。
- 7 賤吏 身分の低い官吏。
- 8 故山 生まれ故郷の地。
- 9 號略 河南省西部の靈宝市の地。

特色	その他	心理描写	人物像	あらすじ	
					人虎伝
					山月記

◆学びを広げる 「人虎伝」と「山月記」を読み比べる ワークシート  
年 組 番 一

兩	扁	江	金	
岸	舟	搖	龍	夜
秋	不	月	山	下
風	住	湧	畔	墨
下	天	金	江	水
二	如	龍	月	
州	水	流	浮	服
				部
				南
				郭

(南郭先生文集)

好	低	綠	泣	從	忽	隔	一		
把	頭	難	不	此	然	屏	夕	悼	
他	照	可	能	琴	鏡	無	幽	亡	
生	向	了	公	心	面	復	聞		
補	空	聚	彈	鳳	鸞	喚	短	大	
此	王	衷	暗	絕	取	聊	夢	沼	
生	祈	情	淚	聲	影	聊	驚	枕	
								山	

(枕山)  
山詩鈔



之、矣、之、給、以、義、寄、北、  
 世、謙、天、之、往、我、書、条、信、取、  
 復、信、正、取、與、信、氏、玄、塩、  
 有、謙、元、塩、公、玄、康、国、於、  
 此、信、年、於、争、曰、謀、不、我、  
 英、方、四、我、所、開、陰、派、国、  
 雄、食、月、国、争、氏、閉、海、  
 男、舍、信、多、在、康、其、仰、  
 子、箸、玄、寡、弓、氏、塩、塩、  
 乎、而、卒、唯、箭、真、甲、於、  
 因、歎、北、命、不、困、嬰、東、  
 溝、日、条、乃、在、君、大、海、  
 然、失、氏、命、米、以、困、今、  
 流、吾、政、賈、塩、塩、川、頼、  
 海、好、馳、人、請、不、信、氏、山、  
 外、者、敵、使、平、自、勇、聞、真、陽、  
 史、久、手、告、備、今、不、之、与、

流	遺	曉	鞭		
星	恨	見	声	題	
光	十	千	肅	不	
底	年	兵	肅	識	
逸	磨	擁	夜	庵	
長	一	大	過	擊	
蛇	劍	牙	河	機	
				山	
				図	
				頼	
				山	
				陽	

(山陽詩鈔)



◆学びを広げる 諫言の方法 ワークシート

年 組 番 〔 〕

① 少孺子がとらた諫言の方法

〔五つの諫言〕の方法

正諫：正面から正しい道理を述べて諫める方法。

降諫：いったん下手に出て、君主の言うことに従いながら、だんだんと諫めてゆく方法。

忠諫：真心をこめ、誠心誠意、ひたむきに諫める方法。

懇諫：「懇」は「おろか」の意。言葉を飾らず、愚直に、朴訥に諫める方法。

諷諫：「諷」は「はめめかす」の意。それとなく遠回しに諫める方法。

② 少孺子とは違う方法で呉王を諫める言葉を考える

Blank box for writing answers to question 2.

張 恩 年 家 異 焚 下 生 可 張  
 飛 天 同 下 姓 香 金 死 宰 飛  
 為 人 月 安 結 再 紙 之 白 日  
 弟 共 同 黎 為 揮 銀 交 馬 我  
 戮 日 庶 兄 而 錢 如 祭 莊  
 誓 死 不 弟 說 宰 何 天 殺 後  
 畢 皇 求 同 誓 殺 烏 烏 有  
 共 天 同 心 日 念 念 一  
 拜 后 年 協 劉 念 劉 祭 桃  
 玄 士 同 力 備 馬 次 地 園  
 德 以 月 教 閔 閔 列 日 我 開  
 為 鑑 同 日 因 扶 羽 張 雖 雖  
 兄 此 生 只 上 報 國 雖 雖  
 閔 心 生 只 上 報 國 雖 雖  
 羽 普 願 願 願 願 願 願  
 次 義 願 願 願 願 願 願  
 之 忘 願 願 願 願 願 願

三 国 志 演 義

踐落塵衆裂矛有此逢百傘如我得一得眼  
 踏盈之將倒喊又退誰言不萬蓋巨乃是隱曹  
 後者声一撞声喝心敢未可軍回雷曹人曹操  
 人有計体望于未日張飛望死戰又見曹操又  
 詩其樵西下曹又戰不戰戰退又軍陣如飛  
 讀數夫難馳聽虎豹之吼一子怎聞霹  
 日人如湖湧馬似山崩自相  
 張翼德大開長坂橋  
 曹操聞知急上馬從陣後張飛  
 隱見後軍青羅傘蓋旄旗來  
 曹操心疑親自來看飛乃厲  
 我人張翼德也誰敢與我決  
 如雷曹軍聞之皆股曹操急  
 傘蓋回顧左右曰向會聞雲長  
 百軍中取上將之首如探囊取  
 逢言未已張飛睜目又喝曰燕  
 此誰敢來決死戰曹操見飛  
 有退心張飛望死戰曹操後軍  
 矛又喝曰戰又不退得肝胆碎  
 裂倒于馬下曹操便回馬而走  
 衆將一齊望西奔正是黃口孺  
 塵之病体西望難聽虎豹之吼  
 落盈者声一撞声喝心敢未可軍  
 踐踏後人有詩讀日人如湖湧馬  
 似山崩自相

上 <sup>上</sup> 旗 <sup>旗</sup> 旂 <sup>旂</sup> 載 <sup>載</sup>	兄 <sup>兄</sup> 曰 <sup>曰</sup> 嗟 <sup>嗟</sup> 予 <sup>予</sup> 弟 <sup>弟</sup>	陟 <sup>陟</sup> 彼 <sup>彼</sup> 岡 <sup>岡</sup> 兮 <sup>兮</sup>	上 <sup>上</sup> 旗 <sup>旗</sup> 旂 <sup>旂</sup> 載 <sup>載</sup>	母 <sup>母</sup> 曰 <sup>曰</sup> 嗟 <sup>嗟</sup> 予 <sup>予</sup> 季 <sup>季</sup>	陟 <sup>陟</sup> 彼 <sup>彼</sup> 此 <sup>此</sup> 兮 <sup>兮</sup>	上 <sup>上</sup> 旗 <sup>旗</sup> 旂 <sup>旂</sup> 載 <sup>載</sup>	父 <sup>父</sup> 曰 <sup>曰</sup> 嗟 <sup>嗟</sup> 予 <sup>予</sup> 子 <sup>子</sup>	陟 <sup>陟</sup> 彼 <sup>彼</sup> 岵 <sup>岵</sup> 兮 <sup>兮</sup>	陟 <sup>陟</sup> 岵 <sup>岵</sup>
猶 <sup>猶</sup> 來 <sup>來</sup> 無 <sup>無</sup> 死 <sup>死</sup>	行 <sup>行</sup> 役 <sup>役</sup> 夙 <sup>夙</sup> 夜 <sup>夜</sup> 必 <sup>必</sup> 借 <sup>借</sup>	瞻 <sup>瞻</sup> 望 <sup>望</sup> 兄 <sup>兄</sup> 兮 <sup>兮</sup>	猶 <sup>猶</sup> 來 <sup>來</sup> 無 <sup>無</sup> 業 <sup>業</sup>	行 <sup>行</sup> 役 <sup>役</sup> 夙 <sup>夙</sup> 夜 <sup>夜</sup> 無 <sup>無</sup> 寐 <sup>寐</sup>	瞻 <sup>瞻</sup> 望 <sup>望</sup> 母 <sup>母</sup> 兮 <sup>兮</sup>	猶 <sup>猶</sup> 來 <sup>來</sup> 無 <sup>無</sup> 止 <sup>止</sup>	行 <sup>行</sup> 役 <sup>役</sup> 夙 <sup>夙</sup> 夜 <sup>夜</sup> 無 <sup>無</sup> 已 <sup>已</sup>	瞻 <sup>瞻</sup> 望 <sup>望</sup> 父 <sup>父</sup> 兮 <sup>兮</sup>	

(詩經)



唯 願 當 歌 對 酒 時	古 人 今 人 若 流 水	今 人 不 見 古 時 月	白 兔 搗 藥 秋 復 春	但 見 青 海 上 來	皎 如 飛 鏡 臨 丹 闕	人 攀 明月 不 得	青 天 有 月 來 幾 時	把 酒 問 月	李 白
月 光 長 照 金 樽 裏	共 看 明 月 皆 如 此	今 月 曾 照 古 人	姮 娥 孤 棲 與 誰 隣	寧 知 曉 向 雲 間 沒	綠 煙 滅 盡 清 輝 沒	月 行 却 與 人 相 隨	我 今 停 杯 一 問 之		

(古文真宝)

どのよう に朗読 するか	詩の 構成と 内容	選んだ 詩

◆学びを広げる 朗読会を開く ワークシート

年 組 番

「

葉限

段成式

南人相伝、秦・漢前有洞主吳氏、土人呼為吳洞、娶而妻、一妻卒、有女名葉限、少惠善、淘金、父愛之、未歲、父卒。後母所苦、常令橫陳、汲深、時嘗得一鱗、二寸余、結鬢為目、遂潛養於盆水、日長、易數器、大不能受、乃投於後池中、女所得、余食輒沈、以食之、女至、池魚必露首、枕岸、他人至、不復出、其母知之、每伺之、魚未嘗見也、因詐女曰、爾無勞乎、吾為爾新其襦、乃易其弊衣、後令汲於他泉、計里數百也、母徐衣其女、衣袖利刃、行向池、呼魚、魚即出、首因斫、殺之、魚已長丈余、膳其肉、味倍常、魚藏其骨、懸椽之下。

逾日、女至、向池、不復見魚矣、乃哭於野、忽有人被髮粗衣、自天而降、慰女曰、爾無哭、爾母殺爾魚矣、骨在糞下、爾婦可取、魚骨藏於室、所須第折之、當隨爾也、女用其言、金環衣食、隨欲而具、及洞、節母往、令女守庭、果、女伺母行遠、亦往、衣翠紡、上衣、驅金履、母所生女認之、謂母曰、此甚似姉也、母亦疑之、女覺、遽反、遂遣一隻、鷹、為洞人所得、母婦但見女抱庭樹、眠、亦不之慮。

其洞、隣海島、中有国名陀汗、兵強、王數十島、木界數千里、洞人遂貨其腹、於陀汗国、国主得之、命其左右

## ■ 芥川龍之介「酒虫」全文

近年にない曇りである。どこを見ても、泥で固めた家々の屋根瓦が、鉛のやうに鈍く日の光を反射して、その下に懸けてある燕の巣をへ、この塩梅では中にゐる雛や卵を、そのまま蒸殺してしまふかと思はれる。まして、畑と云ふ頃は、麻でも黍でも、皆、土いされにくつたり思をさげて、何一つ、青いなりに、萎れてゐないものはない。その畑の上に見える空も、この頃の濁りに中てられたせいか、地上に近い大気は、晴れながら、どんよりと濁つて、その所々に、霧を帯びたやうな、形ばかりの雲の降が、つふつと降かんである。——「酒虫」の話は、この曇りに、わざ／＼炎天の打麦場へ出てゐる。三人の男が始まるのである。

不意な事に、その中の一人は、素裸で、仰向けに地面へ寝ころんでゐる。おまけに、しう云ふ附子か、細引で、手も足もぐる／＼巻にされてゐる。傍側当人は、それを舌に病んでゐる容子もない。背は低い。血色の好い、とじとな鈍重と云ふ感じを起させる。腰がやう／＼屈つた男である。それから、手こらの素焼の瓶が一つ、この男の枕とに置いてあるが、これも中へ何がはいつてゐるのだから、わからない。

もう一人は、黄色い法衣を着て、耳に小さな青銅の環をけた、一見、象脚の香舌な沙門である。皮膚の色が並はずれて黒い上、髪や鬚の細れてゐる所を見ると、どうも老翁の西からでも来た人間らしい。これはさうさから根氣よく、朱柄の腰刀をふりふり、裸の男にたか／＼とする氣を吐き追つてゐるが、左右に少くたびれたと見えて、今では、例の素焼の瓶の側へ来て、七面鳥のやうな恰好をしながら、勿体らしくやがんでゐる。あの一人は、この二人からずつと離れて、打麦場の隅にある草房の軒下に立つてゐる。この男は、腰の先に、鼠の尻尾のやうな輪を、申掛だけにして、裸が隠れる程長い草袴に、結玉をたらし垂らした有刺帯と云ふ掛へである。白い鳥の羽で製つた団扇を、時々大事さうに使つて

ゐる容子では、多分、儒者か何かにかがひない。

この三人が二人とも、云ひ合せてやうに、口を嚙んでゐる。その上、裸に身動きをへもしない。何か、これから起らうとする事に、非常な興味でも持つてゐて、その為には、皆、息をひそめてゐるのではないと思はれる。日は正に、孝午であらう。夫々午膳をしてゐるせいも、吠える声一つ聞えない。打麦場を固んでゐる麻や黍も、青い葉を日にさらせて、ひっそりかんと静まつてゐる。それから、その木に見える容子も、一面に、熱くしく、炎焼をたゞよはせて、雲の峰さへもこの早に、扇息をついてゐるのかと、疑はれる。見渡した所、息が通つてゐるらしいのは、この三人の男の外にない。さうして、その三人が又、関帝廟に安置してある、泥塑の像のやうに流汗を守つてゐる。……

勿論、日本の話ではない。——支那の長山と云ふ所にある劉氏の打麦場で、或年の夏、起つた出来事である。

## 二

裸で、素天に寝ころんでゐるのは、この打麦場の主人で、姓は劉、名は大成と云ふ。長山では、屈指の豪家の一入である。この男の道楽は、酒を飲む一方、朝から、殆ど、酒を離した云ふ事がない。それも、「独酌する毎に輒、「樂を尽す」と云ふのだから、人並をはずれた酒量である。尤も前にも云つたやうに、「貧窮の田三三畝、牛は黍を種う」と云ふので、飲の為に家産が荒はされるやうな世は、万々ない。

それが、何故、裸で、素天に寝ころんでゐるかと云ふら、それには、かう云ふ因縁がある。——その日、劉が、同じ飲仲間の子孫と一しよに、これが、白酒餅を持つてゐた儒者である。風通しのいい、堂で、廿婦人に、罪れながら、棋盤を置はせてゐると、召使のやうな者が来て、一唯今、宝輪寺とかにあると云ふ、坊さんが曹長になりまして、是非、劉主人に御目にかゝりたいと申しますが、いかゞ致しませう」と云ふ。「なに、宝輪寺」かう云つて、劉は小さな顔を、まぶし／＼に、しばたいたいが、やがて、鼻さうに屈つた体を起しながら、「は、こへ御通し申せ」と云ひつて

思想と寓話 韓非子

聖人不期修古

上古之世、人民少而禽獸衆、人民不勝、禽獸虫蛇有  
 聖人、作構木、為巢、以避群害、而民悅之、使王天下、号之  
 曰、有巢氏。民食土、藟、蚌、蛤、蠃、鱉、腥、惡臭、而傷害腹胃、民多  
 疾病、有聖人、作鑽燧、取火、以化腥臊、而民說之、使王天  
 下、号之曰、燧人氏。中古之世、天下大水、而鯀、禹、灋、灋、近  
 古之世、桀、紂、暴乱、而湯、武、征伐、今有構木、鑽燧、於夏后  
 氏之世、煮必為鯀、禹、笑矣、有決灋、於殷周之世、煮必為  
 湯、武、笑矣、然則、今有美堯、舜、禹、湯、武之道、於当今之世  
 者、必為新聖、笑矣、是以聖人不期修古、不法常可、論世  
 之事、因為之備、宋人有耕田者、田中有兔、兔走、觸株、折  
 頸而死、因因、其未而守株、冀復得兔、兔不可復得、而身  
 為宋国、笑、今欲以先王之政治、当世之民、皆守株之類  
 也。

(五卷)

史記—廉頗と藺相如

澠池之会

司馬遷

秦王使者告趙王欲與王为好會於西河外澠池趙王畏秦欲毋行廉頗藺相如計曰王不行示趙弱且怯也趙王遂行相如從廉頗送至境與王訣曰王行度道里會遇之禮畢還不過三十日三十日不還則請立太子為王以絕秦望王許之遂與秦王會澠池秦王飲酒酣曰寡人窃聞趙王好音請奏瑟趙王鼓瑟秦御史前書曰某年月日秦王與趙王會飲令趙王鼓瑟藺相如前曰趙王窃聞秦王善為秦聲請奉盆缶秦王以相娛樂秦王怒不許於是相如前進缶因跪請秦王秦王不肯擊缶相如曰五步之內相如請得以頭血澠大王矣左右欲刃相如相如張目叱之左右皆靡於是秦王不憚為一擊缶相如顧召趙御史曰某年月日秦王為趙王擊缶秦之群臣曰請以趙十五城為秦王壽藺相如亦曰請以秦之咸陽為趙王壽秦王竟酒終不能加勝於趙趙亦盛設兵以待秦秦不敢動

(廉頗藺相如列伝)

## ▼桐壺

『源氏物語』紫式部

## 【口語訳】

(命婦は)母君(桐壺更衣)からの贈り物をご覧に入れる。(帝は)これが亡き人のす  
みかを探し当てた証拠であるならば、とお思いになるが、甲斐のないことである。

(桐壺更衣の魂を)探しに行く幻術師がいてほしい。(そうであれば)人伝てにでも魂  
のありかをそこ知ることができれば、生き生きとした美しさがほしい。太液池の芙蓉、未央  
だとしても筆力に限りがあるので、生き生きとした美しさがほしい。太液池の芙蓉、未央  
宮の柳も、実に(楊貴妃に)似かよった容貌を、唐風の装いは実に麗しいだろうが、(そ  
れに比べ桐壺の更衣が)親しみやすく可憐であったことを思い出されると、(その美しさ  
は)花や鳥の色や声にもたとえようがないのである。朝夕のお話しに比翼の鳥、連理の枝  
となろう、とお約束されたのに、叶うことがない命はかなさが限りなく恨めしいこと  
である。

▼木の花は

『枕草子』清少納言

【口語訳】

梨の花を、中国ではこの上もないものだとして漢詩文などにも作るのは、やはりそうだと  
してもわけがあるのだろうと、強いて（よいところを探そうと）見ると、花びらの端に美し  
い色合いが、ほのかに付いているようである。（蓬萊の仙宮で）楊貴妃が、玄宗皇帝のお遣  
いに会って、泣いたという顔をたとえて、「ひと枝の梨の花が、春、雨に濡れている。」など  
と（白居易が）言ったのは、いいかげんなことではあるまいと思うにつけても、やはり（梨  
の花の）非常にすばらしいことは、比類がないのだろうと思われた。

## ▼七月七日

菅原孝標女

世の中に、長恨歌といふ文を、物語に書きてあるところあんなりと聞くに、いみじくゆかしけれど、え言ひよらぬに、さるべきたよりを尋ねて、七月七日言ひやる。

契りけむ昔の今日のゆかしきに天の川波うちいでつるかな

返し、

たちいづる天の川辺のゆかしきにつねはゆゆしきことも忘れぬ

(更級日記)

## 【口語訳】

世間で「長恨歌」という漢詩を、物語風に書いたものを持っている人がいるそうだと聞いて、なんとかして読みたいとは思いますが、口に出しては頼めないでいると、さるつてがあり、七月七日にこう言い送った。

玄宗と楊貴妃が愛を誓い合ったという昔の「今日」のことの知りたさに、今日の天の川を渡る彦星のように天の川の波のように思い切って（読みたいという願いを）打ち開けさせていただきます。

返歌して、

彦星と織姫が逢うという天の川には私の心もひかれています。平素は不吉な本で（お見せしないもので）すが、お貸し致します。

共通点・相違点	『長恨歌』の記述を ふまえているところ	『長恨歌』から引用 されている語句

◆学びを広げる 「長恨歌」と『源氏物語』『枕草子』を読み比べる ワークシート

年 組 番 〃

『源氏物語』

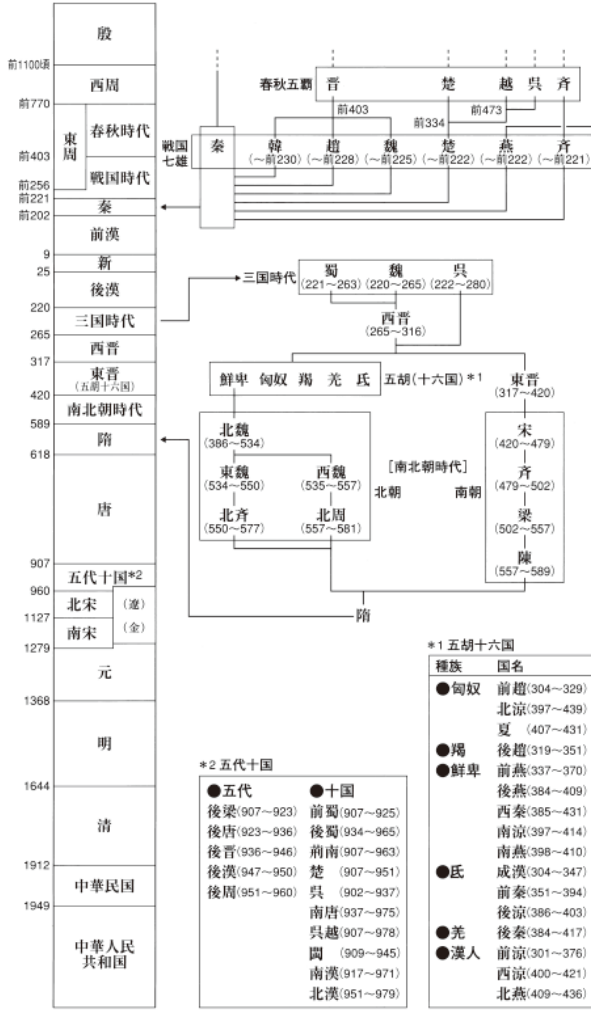
『枕草子』



1748

中国歴代王朝表

中国歴代王朝表



1795

歴代官職表

備考	清	明	宋	唐	魏	後漢	秦	
天子の補佐。官僚を統率。	大学士	内閣大学士	同中書門下平章事	中書令	中書令	司徒	丞相	宰相
魏以降、三公は名譽職。	太保 太傅 太師	太保 太傅 太師	太保 太傅 太師	太保 太傅 太師	司空 司徒 太尉	司空 司徒 太尉	御史大夫 丞相	三公(節)
行政の統轄。			尚書令	尚書令 尚書左右僕射	尚書令 尚書左右僕射	尚書令	尚書令	尚書
詔勅の審議。			門下侍郎	門下侍郎	侍中 給事黃門侍郎	侍中 給事黃門侍郎	侍中 黃門侍郎	三省 門下
詔勅の起草。			中書侍郎	中書侍郎	中書令 中書監		御史大夫	中書
務 ⑥ 外交使節・異民族の接待 ⑧ 国家財政 ⑨ 帝室財政	① 宗廟・祭祀 ② 宮廷の宿衛 ③ 宮門の護衛 ④ 車馬・牧畜 ⑤ 司法・裁判 ⑦ 皇族事務	① 宗廟・祭祀 ② 宮廷の宿衛 ③ 宮門の護衛 ④ 車馬・牧畜 ⑤ 司法・裁判 ⑦ 皇族事務	① 宗廟・祭祀 ② 宮廷の宿衛 ③ 宮門の護衛 ④ 車馬・牧畜 ⑤ 司法・裁判 ⑦ 皇族事務	① 宗廟・祭祀 ② 宮廷の宿衛 ③ 宮門の護衛 ④ 車馬・牧畜 ⑤ 司法・裁判 ⑦ 皇族事務	① 太常寺卿 ② 光祿寺卿 ③ 衛尉寺卿 ④ 太僕寺卿 ⑤ 大理寺卿 ⑥ 鴻臚寺卿 ⑦ 宗正寺卿 ⑧ 司農寺卿 ⑨ 太府寺卿	① 太常寺卿 ② 光祿寺卿 ③ 衛尉寺卿 ④ 太僕寺卿 ⑤ 大理寺卿 ⑥ 鴻臚寺卿 ⑦ 宗正寺卿 ⑧ 司農寺卿 ⑨ 太府寺卿	① 太常寺卿 ② 光祿寺卿 ③ 衛尉寺卿 ④ 太僕寺卿 ⑤ 大理寺卿 ⑥ 鴻臚寺卿 ⑦ 宗正寺卿 ⑧ 司農寺卿 ⑨ 太府寺卿	九寺
③ 教育。	① 土木。 ② 治水。	① 土木。 ② 治水。	① 土木。 ② 治水。	① 土木。 ② 治水。	① 將作監大匠 ② 都水監使者 ③ 國子監祭酒	① 將作監大匠 ② 都水監使者 ③ 國子監祭酒	① 將作監大匠 ② 都水監使者 ③ 國子監祭酒	その他
地方行政官。	① 中央官吏の監察 ② 地方監察 魏以降、地方行政。	① 中央官吏の監察 ② 地方監察 魏以降、地方行政。	① 中央官吏の監察 ② 地方監察 魏以降、地方行政。	① 中央官吏の監察 ② 地方監察 魏以降、地方行政。	① 御史大夫 ② 監察使 ③ 御史中丞	① 御史大夫 ② 監察使 ③ 御史中丞	① 御史大夫 ② 監察使 ③ 御史中丞	監察
	知州	知州	知州	知州	知州	知州	知州	地方

歴代官職表

例) 【古文編】第一部 単元1 説話 / 【漢文編】第一部 単元1 故事成語

古文編 第一部

◆ 説話

単元の振り返りシート

\_\_\_\_年 \_\_\_\_組 名前 \_\_\_\_\_

学習目標

- \* 古典のきまりについて理解を深める
- \* 説話の内容や構成を的確に捉え、登場人物の心情や展開を読み取る
- \* 説話が語り継がれてきた意味について考えを深める

①学習した教材

②学習目標をふまえて、単元での学習を通してわかったこと、できるようになったことを書き出そう。

③単元で学習したことを、これからのような場で生かせるか考え、自分の言葉でまとめよう。

漢文編 第一部

◆ 説話

単元の振り返りシート

\_\_\_\_年 \_\_\_\_組 名前 \_\_\_\_\_

学習目標

- \* 漢文を読むために必要な訓読のきまりを理解する
- \* 故事成語のもととなった漢文を読み、教訓や風刺を読み取る
- \* 故事成語を探し、その由来を調べて発表する

①学習した教材

②学習目標をふまえて、単元での学習を通してわかったこと、できるようになったことを書き出そう。

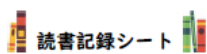
③単元で学習したことを、これからのような場で生かせるか考え、自分の言葉でまとめよう。

■資料補足

- ・ 「学習目標」部分には、教科書の各単元扉に示した「学習目標」が入ります。

ページ	書名	著作者等	版元	発行年	
16	高校生からの古典読本	岡崎真紀子・千本英史・土方洋一・前田雅之	平凡社	平凡社ライブラリー	2012
38	兼好法師 徒然草に記されなかった真実	小川剛生	中央公論新社	中公新書	2017
54	小説伊勢物語 葉平	高樹の心子	日経BP		2020
64	新訂 枕草子	河添房江・津島知明校注	KADOKAWA	角川ソフィア文庫	2024
78	源氏物語解剖図鑑	佐藤晃子／文 伊藤ハムスター／イラスト	エクスタレッジ		2021
96	敗者たちの平安王朝 皇位継承の闇	倉本一宏	KADOKAWA	角川ソフィア文庫	2023
106	更級日記	江國香織	河出書房新社	河出文庫 (古典新訳コレクション)	2023
118	平家物語 大王の巻	吉川日出男	河出書房新社	河出文庫	2021
138	和歌とは何か	渡部泰明	岩波書店	岩波新書	2009
144	夢語り・夢解きの中世	酒井紀美	吉川弘文館	読みなおす日本史	2021
154	枕草子のたくらみ 「春はあけぼの」に秘められた思い	山本淳子	朝日新聞出版	朝日選書	2017
202	源氏物語を読む	高木和子	岩波書店	岩波新書	2021
218	紫式部 女房たちの宮廷生活	福家俊幸	平凡社	平凡社新書	2023
238	平安貴族サバイバル	木村朝子／芦野公平	筑摩書院		2022
266	本居宣長 「ものあはれ」と「日本」の発見	先崎彰容	新潮社	新潮新書	2024
282	阿闍陀西鶴	浅井まかて	講談社	講談社文庫	2016
284	おもしろ古典教室	上野誠	筑摩書房	ちくまプリマー新書	2006
284	平安女子の楽しい！生活	川村裕子	岩波書店	岩波ジュニア新書	2016
284	日本語の古典	山口仲美	岩波書店	岩波新書	2011
284	古文の読みかた	藤井貞和	岩波書店	岩波ジュニア新書	1984
284	古典文法質問箱	大野晋	KADOKAWA	角川ソフィア文庫	1998
284	日本文学の古典50選	久保田淳	KADOKAWA	角川ソフィア文庫	2020
284	知ってる古文の知らない魅力	鈴木健一	講談社	講談社現代新書	2006
284	詳解 有職装束の世界	八條忠基	KADOKAWA	角川ソフィア文庫	2020
285	連句の教室 ことばを付けて遊ぶ	深沢真二	平凡社	平凡社新書	2013
285	ずらずら読める風姿花伝	林望	講談社	講談社+α文庫	2018
285	花よりも花の如く 1	成田美名子	白泉社	花とゆめCOMICS	2003
285	あさきゆめみし 新装版 1	大相和紀	講談社	KC KISS	2021
285	虫のづる姫君 堤中納言物語	蜂飼耳 訳	光文社	光文社古典新訳文庫	2015
285	とりかえ・ばや 1	さいとうちほ	小学館	フラワーコミックスアルファ	2012
285	ぼおるべん古事記 1	ころの史代	平凡社		2012
285	八大伝	山田風太郎	KADOKAWA	角川文庫	2022
285	殿り合う貴族たち	槇田信一	KADOKAWA	角川ソフィア文庫	2008

ページ	書名	著作者等	版元	発行年	
16	四字熟語で始める漢文入門	内満字二郎	筑摩書房	ちくまプリマー新書	2024
26	漢詩の流儀 その真髄を味わう	松原朗	大修館書店		2014
46	項羽と劉邦 上	司馬遼太郎	新潮社	新潮文庫	1984
60	中国名文選	興膳宏	岩波書店	岩波新書	2008
76	論語	土田健次郎 訳注	筑摩書房	ちくま学芸文庫	2023
92	李陵・山月記	中島敦	新潮社	新潮文庫	2013
100	知っておきたい日本の漢詩 偉人たちの詩と心	宇野直人	勉誠出版		2018
108	中国古典「一日一話」	守屋洋	三笠書房		2003
120	三国志 1	横山光輝	潮出版社	希望コミックス	1974
130	中国名詩選 1	川合康三	岩波書店	岩波文庫	2015
142	中国奇想小説集 古今異界万華鏡	井波律子	平凡社		2018
158	図解 諸子百家の思想	浅野裕一	KADOKAWA	角川ソフィア文庫	2024
174	司馬遼	武田泰淳	中央公論新社	中公文庫	2022
184	科擧の話 科擧制度と官人官僚	村上哲見	講談社	講談社学術文庫	2000
196	白楽天詩選 上	川合康三	岩波書店	岩波文庫	2011
206	新訳漢文大系 1 論語	吉田賢抗	明治書院		1960
206	易経	三浦陽雄	KADOKAWA	ビザンズ・クラシックス 中国の古典	2010
206	漢文の話	吉川幸次郎	筑摩書房	ちくま学芸文庫	2006
206	中国文学の愉しみ世界	井波律子	岩波書店	岩波現代文庫	2017
206	日本人と漢字	榎原宏之	集英社インターナショナル		2015
206	漢詩百首 日本語を豊かに	高橋睦郎	中央公論新社	中公新書	2007
206	カモメの日の読書 漢詩と暮らす	小津夜景	東京四季出版		2018
206	李白 漂泊の詩人 その夢と現実	金文京	岩波書店	書物誕生 あたらしい古典入門	2012
207	李白と杜甫	高島俊男	講談社	講談社学術文庫	1997
207	張良	宮城谷昌光	中央公論新社		2024
207	三国志 演義から正史、そして史実へ	渡邊義浩	中央公論新社	中公新書	2024
207	論語物語	下村湖人	河出書房新社	河出文庫	2020
207	儒教入門	土田健次郎	東京大学出版会		2011
207	仙人の桃	南仲坊	中央公論新社		2024
207	頼山陽のことば	長尾直茂	明徳出版社	MY古典	2017
207	漢文脈と近代日本	齊藤希史	KADOKAWA	角川ソフィア文庫	2014
207	源氏物語の時代 一条天皇と后たちのものがたり	山本淳子	朝日新聞出版	朝日選書	2007



No. \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_組 名前 \_\_\_\_\_

書名	
著作者	
出版社・発行日	

読み始めた日	年 月 日	読み終えた日	年 月 日
--------	-------	--------	-------

読もうと思った いささつ	
あら筋・内容	
読後の感想	

読書感想文の書き方

同じ本を読んでも、読み手によって感想はさまざま。読書感想文は読み手のものの見方考え方を映し出す。読書感想文の本を選ぶときは、本の題名、あら筋、目次、冒頭、友達からのお薦めなどを参考に、「この本を読みたい。」と感じたものを選び、

- ① 本を読み、次のような点についてメモする。
  - ・読み終わったが、どんな気持ちになったか、それはなぜか。
  - ・疑問に思ったこと。
  - ・心に残った言葉や場面とその理由。
  - ・作品の中で起ころべきことと自分が体験したこととを比べて、
  - ・印象的な登場人物とその特徴。
  - ・登場人物が自分と似ているところ、異なるところ。
  - ・本を読んで自分の考えがどのように変わったか。

- ② 内容を整理する。
  - ・メモを反復し、どの部分を感想文に書くか検討する。



カムパネルラの行動に共感している場面を書こうか。

- ③ 構成を考える。
  - ・自分の考えや感想がよく伝わるように、感想文の構成を考える。
- ④ 感想文を書く。
  - ・下の例を参考にしながら書き方を学ぶ。

- ⑤ 推敲する。
  - ・誤字や脱字、言葉の誤用はないか。
  - ・主語と述語が対応しているか。
  - ・一文が長くてわかりにくいくないか。
  - ・くだけた表現や略語語を用いていないか。

みんなの幸いを輝しに行く勇氣

一年三組 田中広実

「僕もうあんな大きな船の中だつてわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「銀河鉄道之夜」の中でいちばん心に残った言葉だ。この言葉に、ジョバンニの決心を感した。そして、ジョバンニがこう思えたのはカムパネルラがそばにいたからだと思う。

ジョバンニは親友のカムパネルラとともに銀河鉄道に乗って旅をする。列車にはさまざまな人が乗って来て、そして降りてゆく。「銀河鉄道之夜」はジョバンニが出会いと別れを繰り返す。「ほんとうのさいわい」について考える物語だ。けれど、「ほんとうのさいわい」とはなんだろう。

(中略)

「ほんとうのさいわい」について考える間に、私の頭に浮かんだのは、遠足で行った登山でのことだった。急な下り坂で滑りそうになったとき、そばにいた友達がとっさに私の手をつかんでくれた。しかし、二人ともはでに尻もちをついた。

「ごめんね」と私が言っても先に、友達はい、「何がしなかった?」「けがしなかった?」と真っ先に私の心配をした。とっさに私の手をつかみ、心配してくれる友達が最後のカムパネルラに重なった。

実は、カムパネルラは既に「みんなのほんとうのさいわい」のために行脚していた。結果、カムパネルラは、ザネリを助けるために川に飛び込んだことがわかった。カムパネルラも「みんなのほんとうのさいわい」を実行して銀河鉄道に乗り込んだのだ。ジョバンニは、「みんなのほんとうのさいわい」を探するために、カムパネルラと一緒にどこまでも行きたいと言っていたが、その思いはかなわない。このときのジョバンニのことを思うと心が苦しくなった。

けれど、ジョバンニは銀河鉄道の旅を通して、一人でもみんなの幸いを輝しに行く勇氣をいつかできたのではないだろうか。そして、カムパネルラの行動を誇りに感じていると思う。私も本を読みながら、「みんなのほんとうのさいわい」について考える旅をした。そして、ジョバンニが決意したように、私もみんなの幸いを輝し人になりたいと思った。

**先頭**  
読んでみたくなる題名を考える。

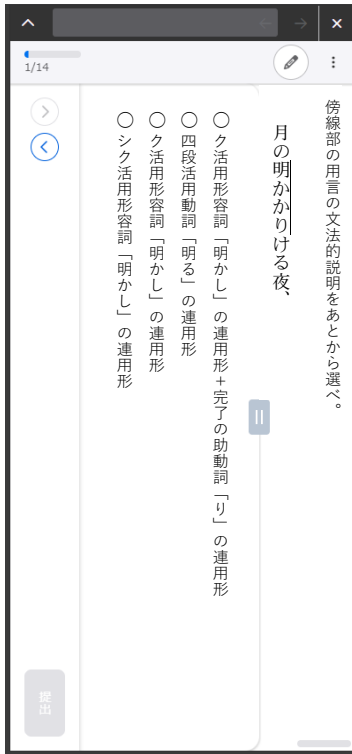
**冒頭**  
興味を引くために、感想文の中心となる話題で始める。  
・印象に残った言葉を引用する。  
・読んでどんな気持ちになったか、それはなぜかを書く。

**あら筋**  
誰がどうなった話か、どんなことが中心の話題かなを簡単にまとめて、登場人物や登場点を述べる。

**自分との共通点**  
登場人物と似た体験や、同じような気持ちになったことについて考える。

**まとめ**  
本を読み、どんな思いをもったか、自分の考えがどう変わったかを書く。

例) 【古文編】博雅の三位と鬼の笛



【漢文編】漱石枕流



■資料補足

- ・【古文編】 p. 10 「博雅の三位と鬼の笛」、【漢文編】 p. 10 「漱石枕流」の二次元コードを読み込んだ場合の問題画面イメージです。
- ・問題はランダムに出題されます。